

- ・圧入後の坑底圧力の解析結果から、貯留層の浸透率は25mD程度であると推測した。

イ) No. 3a 圧入テスト (対象区間:掘削深度 1,077~1,217m の区間で 57.5m 分^{注)})

- ・圧入能力テストでは最大 1,200kl/日のレートでの水圧入を実施した。累計圧入量は 248.5kl であった。
- ・圧入後の坑底圧力の解析結果から、貯留層の浸透率は 9mD 程度であると推測した。

注) No. 3a 圧入テストの対象区間は、No3 圧入テスト対象区間に 40m 分の区間を加えて実施した。

2.6 苫小牧 CCS-2 調査結果の概要

2.6.1 掘削結果

2011年5月4日から6月15日までの43日間で、苫小牧 CCS-1 の北東 37 m の位置において深度 1,218 m まで掘削した。調査終了後は、耐 CO₂ セメントを用いて埋め立てた (廃坑作業を実施した)。

2.6.2 地質調査結果

苫小牧 CCS-2 の深度 993~1,218m の萌別層泥岩層および砂岩層において、直径 8cm のコア試料を連続採取した。掘削後は、苫小牧 CCS-1 との比較を目的として物理検層を実施した。

コア試料を用いて岩石物性分析により以下を確認した。

1) 萌別層砂岩層

- ・孔隙率：25~40% (封圧下)
- ・空気浸透率：1~1,000mD (封圧下)
- ・不動水飽和率：27~75% (平均 51.5%、遠心分離法、1.6MPa 相当)

2) 萌別層泥岩層

- ・孔隙率：32.4~37.2% (封圧下)
- ・水浸透率：0.80×10⁻³~1.73×10⁻³mD
- ・スレシヨルド圧力
 - 孔径分布からの推定：0.14~1.56MPa
 - 段階昇圧法 (CO₂-水系)：0.75~1.67MPa

2.6.3 リークオフテスト結果

深度 989～993m の萌別層泥岩層下部において、遮蔽層強度を測定することを目的としてリークオフテストを実施した。その結果、テスト区間の中央深度 991m におけるリークオフ圧力は 14.6MPa であり、等価泥水比重 1.50 であることがわかった。

2.7 滝ノ上層解析結果

2.7.1 貯留層

滝ノ上層は火山性碎屑物を含む火山岩層であり、火山岩・凝灰岩からなる滝ノ上層 T1 部層とその下部の泥岩層からなる。滝ノ上層 T1 部層（層厚が約 600m）は、さらに下部の溶岩～凝灰角礫岩卓越層と上部の凝灰岩卓越層とに分けられる。

図 2.7-1 は、調査地点周辺の既存坑井の滝ノ上層 T1 部層における溶岩～凝灰角礫岩および凝灰岩の孔隙率と浸透率の関係をプロットしたものである。本層では、溶岩～凝灰角礫岩相では良好な圧入性状が期待できることから圧入対象となると考えた（図 2.7-1 青い楕円部）。また、凝灰岩相全体としてはそれほど良好な性状は期待できないが、部分的に高い孔隙率を有する領域が存在し、圧入対象となると考えた（図 2.7-1 赤い楕円部）。実地調査から得られた貯留層性状の概要を表 2.7-1 にまとめる。

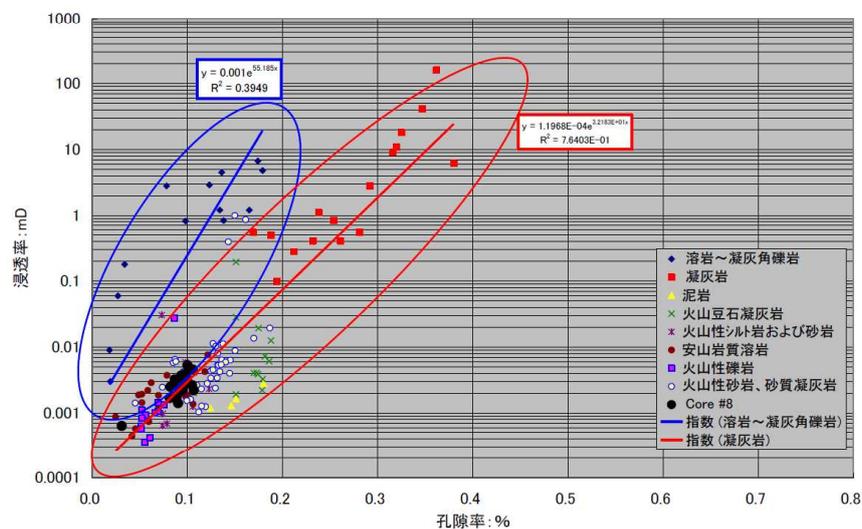


図 2.7-1 コア試料の孔隙率と浸透率のクロスプロット

表 2.7-1 滝ノ上層 T1 部層 貯留層性状一覧

項目	
対象深度	約2,400～3,000m(垂直深度)
層厚	約600m
岩相	溶岩～凝灰角礫岩、凝灰岩
孔隙率	5～18%(苫小牧CCS-1コア試験:封圧下) 3～19%(周辺坑井のコア試験:封圧下)
浸透率	0.68～1.18mD(苫小牧CCS-1圧入テスト解析結果)* 0.001～0.01mD(苫小牧CCS-1コア試験:封圧下、空気) 0.002～7mD(周辺坑井のコア試験:封圧下) 0.01mD～2.6D(坑井Aでの物理検層解析結果)
水圧入テスト (苫小牧CCS-1)	最大650kl/日(掘削深度2,907～3,698mのうち186m)*

*圧力・温度測定結果から圧入区間は2,907～2,931mのみと判断した。

2.7.2 遮蔽層

遮蔽対象層となる振老層および平取+軽舞層は、約1,100mの層厚を有する。苫小牧CCS-1におけるリークオフテスト結果から、振老層下部で等価泥水比重1.96の強度を持つことを確認した。

苫小牧沖構造の西翼には断層が存在するものの、振老層および平取+軽舞層は主に泥岩からなることと、周辺坑井データを用いた地層水塩分濃度分布と地層圧力分布から、過去に遮蔽層を超えた垂直方向の地層水の移動はないと考えられる。

振老層で採取したコア試料では、水浸透率が 8.2×10^{-6} ～ 36.7×10^{-6} mD、スレシヨルド圧力が1.29MPa～15.02MPa以上の実測データが得られている。後者については、1.29MPaといた比較的低い分析値が得られているものの、CO₂貯留条件と同様の条件で分析をしたところ、11.72MPa以上の値が得られている。

以上の条件・データから、振老層および平取+軽舞層は、良好な遮蔽性能を有する地層であると考えられる。実地調査から得られた遮蔽層性状の概要を表2.7-2にまとめる。

表 2.7-2 滝ノ上層 T 1 部層に対する遮蔽層性状一覧

項目	
層序	振老層および平取+軽舞層
岩相	泥岩
層厚	約1,100m
孔隙率	12.4~18.0%(苫小牧CCS-1コア試験:封圧下)
浸透率	$8.2 \times 10^{-6} \sim 36.7 \times 10^{-6} \text{mD}$ (苫小牧CCS-1コア試験:水浸透率)
スレシヨルド圧力	1.29~12.3MPa [*] 以上(苫小牧CCS-1コア試験:N ₂ -水系残差圧力法) 11.72MPa [*] 以上(苫小牧CCS-1コア試験:CO ₂ -水系段階昇圧法) <small>※ブレイクスルーしなかったことから測定値以上のスレシヨルド圧力を有すると判断。</small>
リークオフ圧力 (苫小牧CCS-1 リークオフテスト)	45.3MPa(等価泥水比重1.96) (振老層(苫小牧CCS-1)2,352mVD(垂直深度))

2.7.3 地質モデル構築

(1) 岩相分布・性状分布の推定

滝ノ上層は、火山岩起源であることから、砂岩などの堆積岩層と比較して不均質性が高く、CO₂挙動予測シミュレーションを実施するためには、空間的な岩相分布およびその性状分布の推定が特に重要となる。このため、3Dデータを活用した岩相分布・性状分布の推定を実施し、CO₂挙動予測シミュレーションの地質構造モデルへ反映させた。

具体的には、まずスケルトン・アトリビュート解析と呼ばれる手法を用いて弾性波形の特徴を強調し、次にSOM (Self-organizing Maps : 自己組織化マップ) 解析による波形分類を行い、さらにクラスター解析の代表的な手法である K-means 法により各分類の境界を決定し、最後に坑井Aにおける溶岩～凝灰角礫岩の区間との比較により、この岩相を示す弾性波形を決定することにより、3Dデータ上で溶岩～凝灰角礫岩の分布領域を推定した。

そして、溶岩～凝灰角礫岩についてはコア試料と物理検層データから、AI (Acoustic Impedance : 音響インピーダンス : 密度×弾性波速度) と孔隙率とが逆相関関係にあることから、3Dデータ上も溶岩～凝灰角礫岩の分布領域ではAI と孔隙率とが逆相関関係にあると考えた。

一例として、図 2.7-2 に滝ノ上層 T 1 部層下部の岩相分布 (K-means Index) を、図 2.7-3 に3Dデータから取得した滝ノ上層 T 1 部層下部の音響インピーダンスを示す。

なお、苫小牧CCS-1が掘削された場所周辺は、高AI領域(孔隙率・浸透率が低い)

であった。

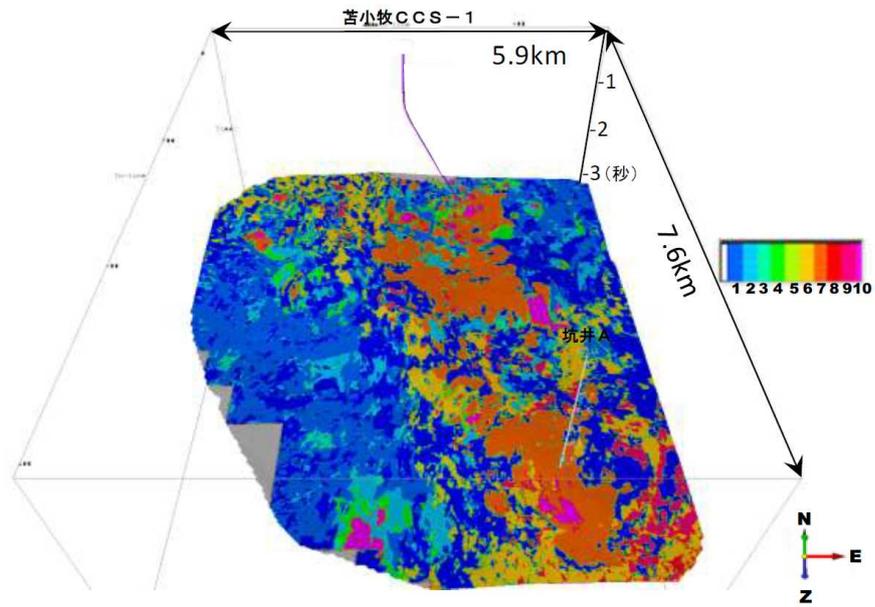


図 2.7-2 滝ノ上層 T1 部層下部の岩相分布 (K-means Index)

注) オレンジの部分が良好な貯留層性状が期待される岩相 (溶岩～凝灰角礫岩相)

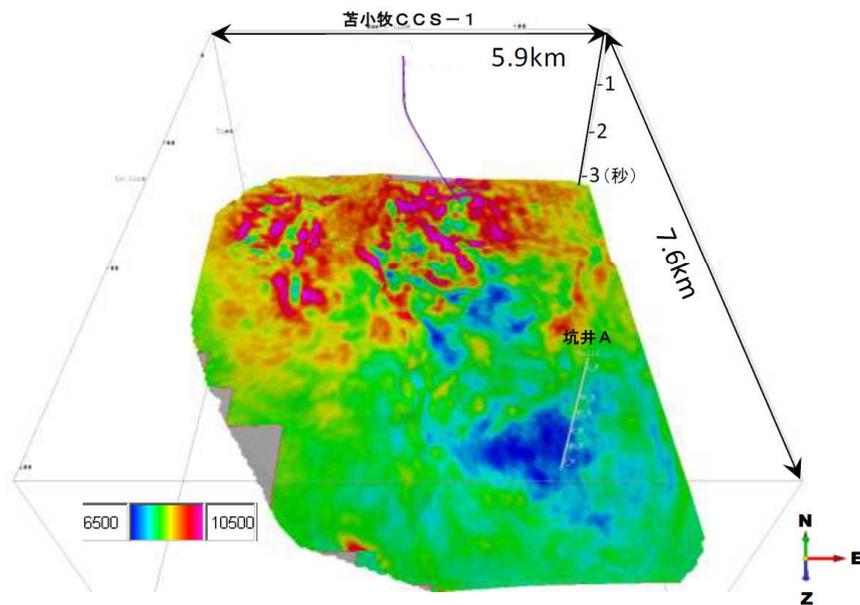


図 2.7-3 滝ノ上層 T 1 部層下部の音響インピーダンス

注) 青色の部分が低 A I で高孔隙率と考えられる箇所。高浸透率である可能性も高い。

(2) 地質構造モデル構築

CO₂の挙動予測シミュレーションに必要な貯留層モデルを構築するため、3Dデータで解釈に用いた各層準の時間構造を深度構造へ変換した。

地質構造モデルの構築には、構造地質解釈で作成された層準（上位より、第四系基底・鶴川層基底・萌別層基底・荷菜層上部基底・荷菜層下部基底・平取+軽舞層基底・滝ノ上層上限（振老層基底）・滝ノ上層 T 1 部層上部基底・滝ノ上層 T 1 部層基底・滝ノ上層基底）を用いた。深度変換された滝ノ上層 T 1 部層上限のモデル断面位置を図 2.7-4 に、主要な層準の東西断面（地質モデル断面）を図 2.7-5 に各々示す。

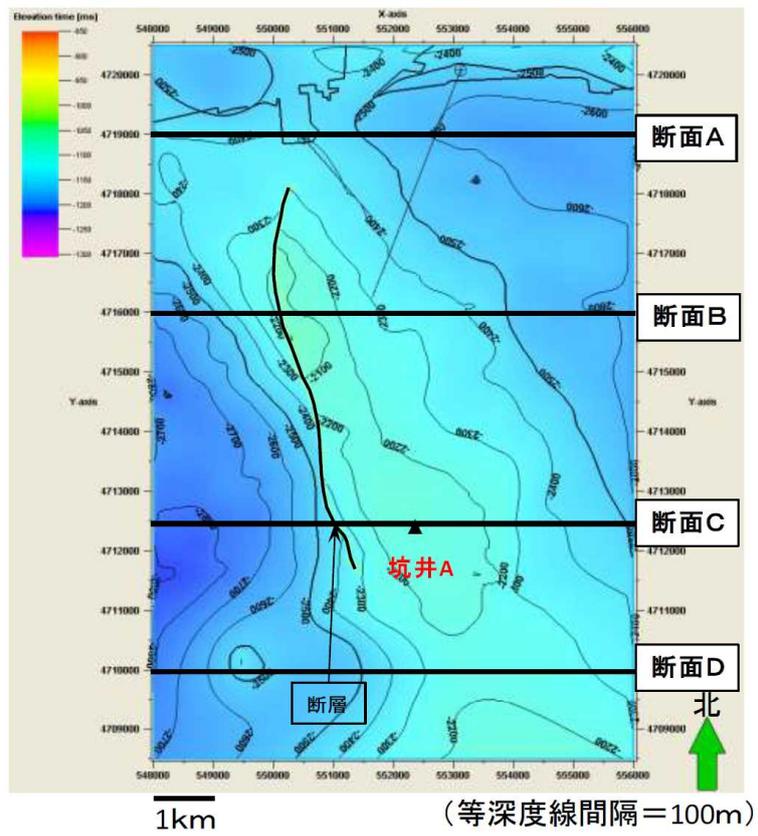
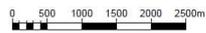
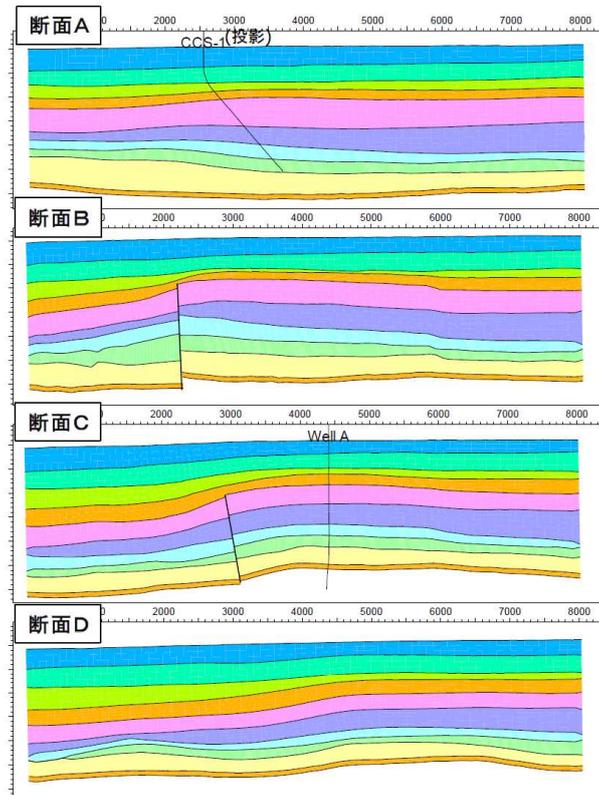


図 2.7-4 モデル断面位置 (構造図は滝ノ上層 T 1 部層上限)
(図中の X 軸および Y 軸は世界測地系 WGS84 の UTM54 系の座標)



- 第四系
- 鷓川層
- 萌別泥岩層【遮蔽層】
- 萌別砂岩層【貯留対象層】
- 荷菜層【遮蔽層】
- 平取+軽舞層【遮蔽層】
- 振老層【遮蔽層】
- 滝ノ上層T1部層(上部)【貯留対象層】
- 滝ノ上層T1部層(下部)【貯留対象層】

図 2.7-5 地質モデル断面
(苫小牧 CCS-1 は投影表示)

さらに、CO₂挙動予測シミュレーションを行うにあたり、各層準内に以下のようにグリッドセルを作成した。

・水平方向のグリッドセルサイズ

東西方向 (i) および南北方向 (j) : 100m

(i 方向セル数: 80 セル、J 方向セル数: 120 セル)

・垂直 (k) 方向のグリッドセルサイズ

鵜川層 :	3 レイヤーに分割	(k 方向セル番号 : 1~3)
萌別層 :	3 レイヤーに分割	(k 方向セル番号 : 4~6)
荷菜層上部 :	3 レイヤーに分割	(k 方向セル番号 : 7~9)
荷菜層下部 :	5 レイヤーに分割	(k 方向セル番号 : 10~14)
平取+軽舞層 :	5 レイヤーに分割	(k 方向セル番号 : 15~19)
振老層 :	5 レイヤーに分割	(k 方向セル番号 : 20~24)
滝ノ上層 T 1 部層上部 :	15m ごとに分割	(k 方向セル番号 : 25~57)
滝ノ上層 T 1 部層下部 :	15m ごとに分割	(k 方向セル番号 : 58~96)
滝ノ上層下部 :	5 レイヤーに分割	(k 方向セル番号 : 97~101)
南長沼層 :	5 レイヤーに分割	(k 方向セル番号 : 102~106)

構造モデルの鳥瞰図を図 2.7-6 に示す。滝ノ上層 T 1 部層はCO₂圧入対象層準であり、シミュレーションを詳細に行うため上下の地層よりも小さめの垂直方向サイズとなるようにした。

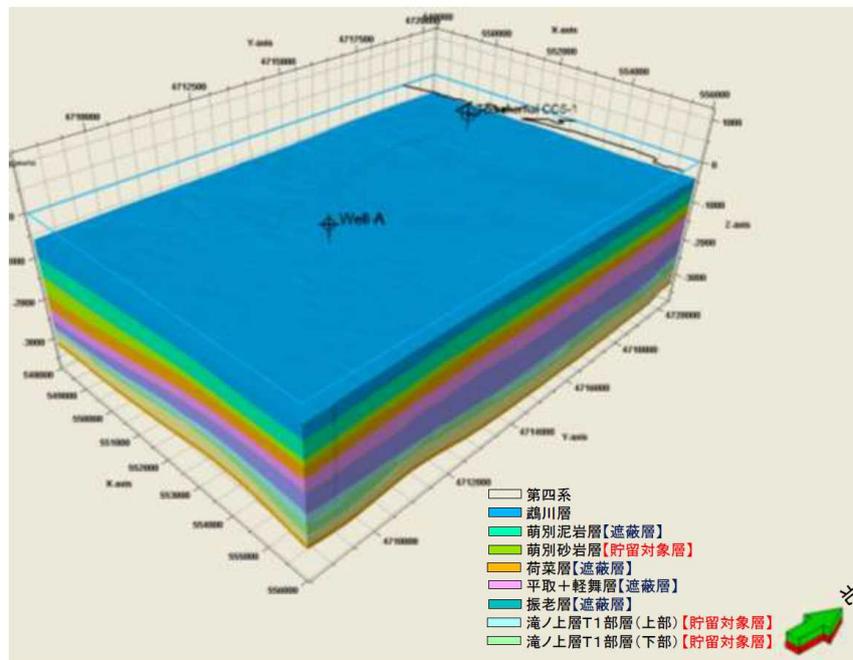


図 2.7-6 三次元地質モデル鳥瞰図

(3) 属性モデル構築

作成した構造モデルの滝ノ上層 T 1 部層とそれ以外の層準に属性（岩相、孔隙率および浸透率）をそれぞれ与え、CO₂挙動予測シミュレーションのための地質モデルを作成した。

まず、CO₂圧入対象層である滝ノ上層 T 1 部層における属性値分布は、3Dデータ、苫小牧 CCS-1 および坑井 A のデータより、地球統計学的手法を用いて、岩相、孔隙率および浸透率の分布が確率的に 50 個の具現モデルを作成した。図 2.7-7 に作業フロー図を示す。

まず、図 2.7-2 に示した 3D データの解析により求められた 3D 範囲（図 2.1-1）内の岩相分布を溶岩～凝灰角礫岩相（図中の橙色）と凝灰岩相（図中の橙色以外）として、構造モデルへ与えた（図 2.7-7 の Facies-①）。また、図 2.7-3 に示した音響インピーダンス（AI）の分布から岩相ごとに AI と孔隙率の関係式を用いて 3D 範囲内の孔隙率分布を構造モデルへ与えた。（図 2.7-7 の Φ-②）。また、苫小牧 CCS-1 および坑井 A の検層データより求められた孔隙率から坑井孔隙率（図 2.7-7 の Φ-③）を作成した。

次に、Facies-①から逐次インディケータシミュレーション（Sequential Indicator

Simulation : SIS) を用いて、モデル構築範囲 (図 2.1-1) 全体に拡張した岩相分布 (図 2.7-7 の Facies-④) を作成した。Facies-④が具現モデルの岩相分布となる。この岩相ごとに逐次ガウシアンシミュレーション (Sequential Gaussian Simulation : SGS) を用いて、モデル構築範囲全体に拡張した孔隙率分布 (図 2.7-7 の Φ -⑤) を作成した。

具現モデルの孔隙率分布 (図 2.7-7 の Φ -⑥) は、孔隙率分布 Φ -⑤および坑井孔隙率 Φ -③を使用して SGS にて作成した。なお、本 SGS のパラメータは Φ -⑤作成時と同じ値を使用し、2 つの岩相における孔隙率の出現確率は 3 D 範囲内での出現確率 (図 2.7-8) とした。

具現モデルの浸透率分布 (k -⑦) は孔隙率分布 (Φ -⑥) に対して、苫小牧 CCS-1 の周辺坑井と苫小牧 CCS-1 のコア分析結果から得られた以下の岩相別の孔隙率-浸透率関係式 (図 2.7-1) を用いて作成した。

$$\text{凝灰岩相} \quad : k = 0.00011968e^{32.183\phi}$$

$$\text{溶岩～凝灰角礫岩相} \quad : k = 0.001e^{55.185\phi}$$

ここで、 k : 浸透率[mD]、 ϕ : 孔隙率[frac]である。

本属性モデルでは孔隙率は AI より求めたが、浸透率と AI の関係については考察されていないため、10,000mD を超える浸透率が導き出されることがある。そのため、上記関係式により求められた浸透率分布に対して、10,000mD 以上の浸透率を 10,000mD とする補正を行った。

以上の作業を 1 フローとして、岩相分布 (Facies-④)、孔隙率分布 (Φ -⑥)、浸透率分布 (k -⑦) の作成を繰り返すことにより、岩相分布・孔隙率分布・浸透率分布について確率的に 50 個の具現モデルを作成した。参考例として、50 個の内から 4 つの具現モデルにおける孔隙率分布を図 2.7-9 に示す。

他の層準における属性値は、苫小牧 CCS-1 の振老層から採取されたコアの分析値を一樣に分布させた。

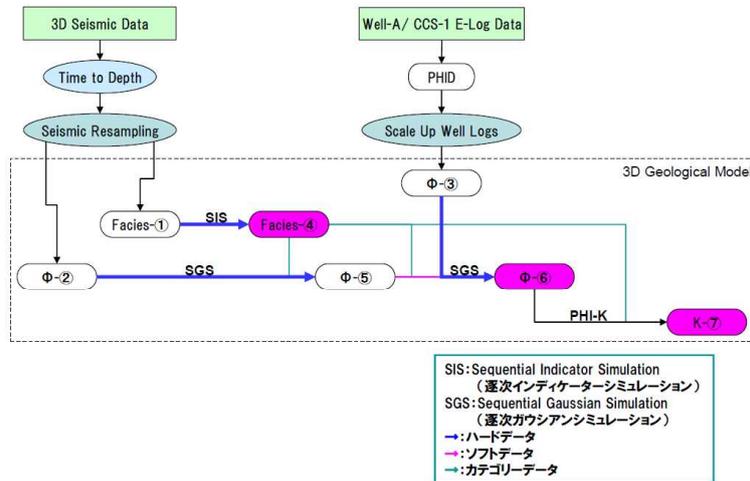


図 2.7-7 滝ノ上層 T1 部層内の属性値分布作成における作業フロー

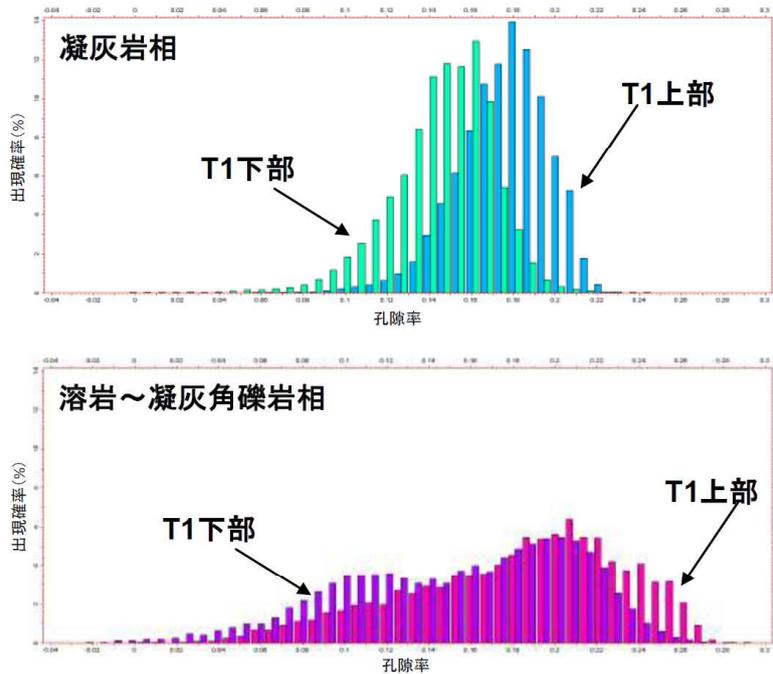


図 2.7-8 3D探査範囲内で取得された孔隙率の出現確率

■: 滝ノ上層 T1 部層上部溶岩～凝灰角礫岩相、■: 滝ノ上層 T1 部層上部凝灰岩相、
■: 滝ノ上層 T1 部層下部溶岩～凝灰角礫岩相、■: 滝ノ上層 T1 部層下部凝灰岩相)

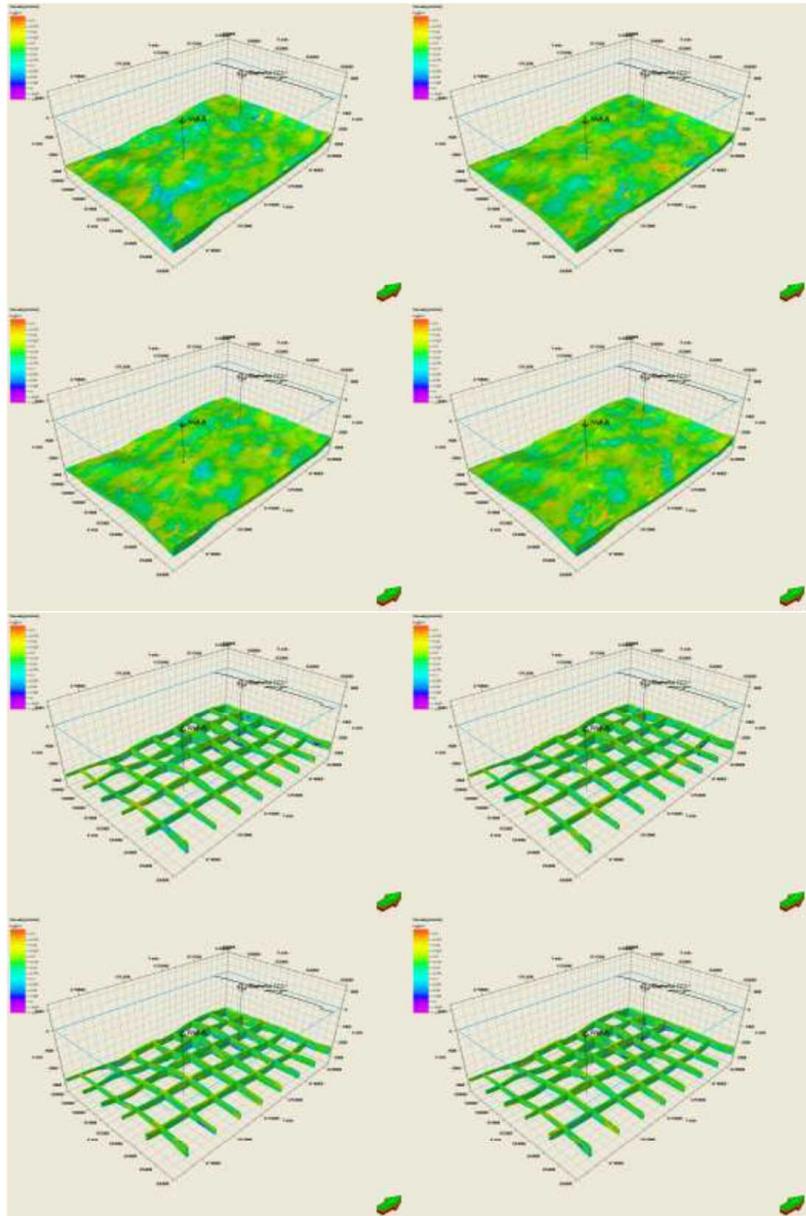


図 2.7-9 50 個の内 4 個の具現モデルの参考例：滝ノ上層 T 1 部層の孔隙率分布
 (上図：全体表示、下図：格子状に断面を表示、図中の矢印は北を示す)

2.7.4 CO₂挙動予測シミュレーション

構築した50個の地質モデルを用いて、CO₂挙動予測シミュレーションを行い、貯留層および遮蔽層の性能評価を実施した。シミュレーションでは、CO₂を25万トン/年×3年間圧入し、圧入期間中の圧入性やその後の貯留CO₂の挙動予測等を行った。CO₂挙動予測シミュレーションの結果および評価については、第3章に示す。

2.7.5 弾性波探査シミュレーション

CO₂挙動予測シミュレーションで得られたCO₂の拡がりの予測結果から、弾性波探査によるCO₂賦存範囲の検出可能性等を検討することを目的として、弾性波探査シミュレーションを行った。シミュレーションでは、作成した二次元速度構造モデルを入力として差分法による二次元弾性波探査シミュレーション(P波)を実施し、合成弾性波記録を作成した。

CO₂圧入前後の貯留層の変化による反射断面での応答を見るため、CO₂累積圧入量12.5万トン、25万トン、50万トン、75万トンの各場合において、CO₂圧入開始前の記録との差を求めた。これにより、12.5万トン圧入の時点でCO₂の拡がりは認識可能であり(図2.7-10)、25万トン圧入の時点ではCO₂の拡がりを明確に検知できることがわかった(図2.7-11)。これにより滝ノ上層T1部層においては、累積CO₂圧入量20万トン、25万トン、30万トンという圧入過程で弾性波探査を繰り返し実施することにより、CO₂の挙動(拡がっていく様子)が検知可能と判断した。

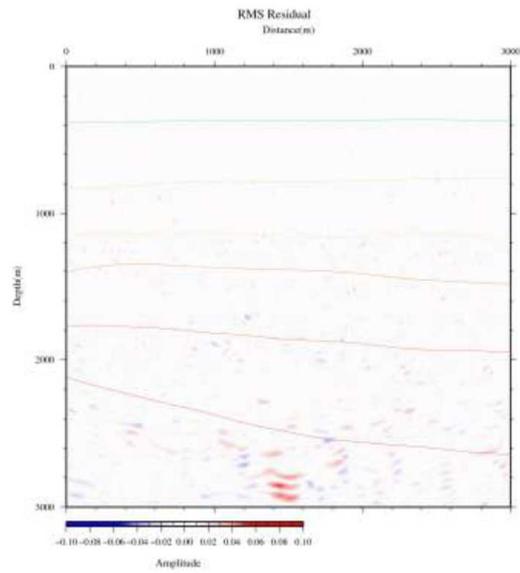


図 2.7-10 差分（深度断面、滝ノ上層 T 1 部層、CO₂ 圧入 12.5 万トン圧入後）

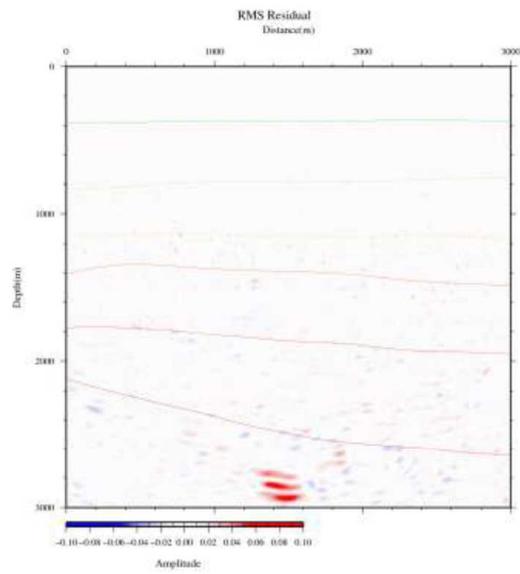


図 2.7-11 差分（深度断面、滝ノ上層 T 1 部層、CO₂ 圧入 25 万トン圧入後）

2.8 萌別層解析結果

萌別層はシルト岩～泥岩からなる上部（萌別層泥岩層）と主に砂岩からなる下部（萌別層砂岩層）に分けられる。萌別層砂岩層を貯留層とし、萌別層泥岩層を遮蔽層と想定した。

2.8.1 貯留層

萌別層砂岩層は、沖合に前進しながら陸棚に堆積したファンデルタからなり、砂岩を主体とし、砂礫岩、シルト岩を伴う。緩やかな西傾斜を示し、層厚は約100mである。三次元弾性波探査では、萌別層下部に連続の良い強反射が認められることから砂礫岩層の発達を示唆される。この強反射は検討地域の北東部で顕著であり、南および西に向かって減衰するため、砂礫岩層は北東部を中心に発達していると解釈される。

本層準は比較的浅い海底で堆積した砂岩であると考えられることから、砂岩の分布範囲については注意が必要である。そこで、苫小牧CCS-1および3Dデータを用いて、堆積学的検討を行った。その結果は以下の通りである。

萌別層砂岩層は、シーケンス層序学でいう高海水準期堆積体（HST）に相当し、ファンデルタ・陸棚（Shelf）・斜面（Slope）の3つに分類できる（図2.8-1）。このうち砂岩の発達が最も期待できるのがファンデルタで、陸棚、斜面と砂岩の割合が少なくなっていく。少なくとも5つのファンデルタが北東から南西へ向かって前進して堆積したと解釈した。ファンデルタは、堆積物供給源である北東側がより砂岩が多く、南西に向かって泥岩が多くなる傾向にあると推定した。実地調査から得られた貯留層性状の概要を表2.8-1にまとめる。

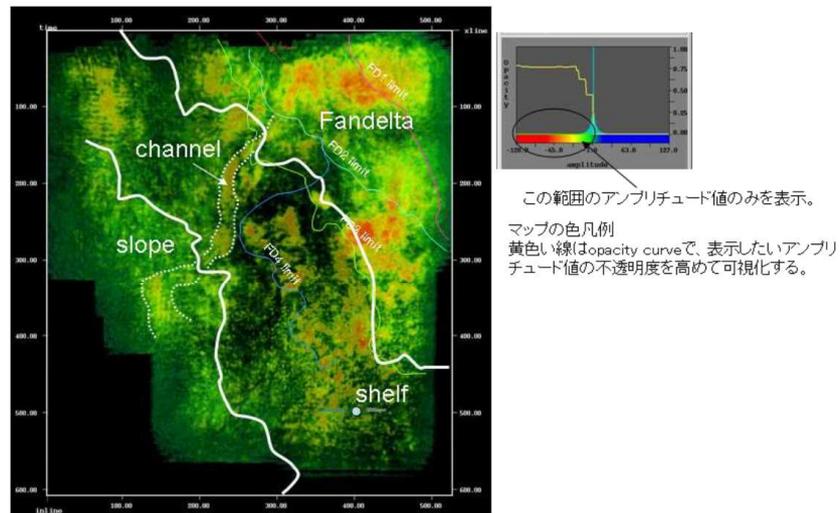


図 2.8-1 萌別層HST区間の堆積相解釈図（図の上部の方角は北）
 （暖色系は負の高い振幅値、寒色系は負の低い振幅値を示す。正の振幅は非表示。）

表 2.8-1 萌別層砂岩層 貯留層性状一覧

項目	
対象深度	約1,100~1,200m(垂直深度)
層厚	約100m
岩相	砂岩(礫質砂岩、シルト岩を伴うファンデルタ堆積物)
孔隙率	25~40%(苫小牧CCS-1コア試験:封圧下) 20~40%(物理検層解析結果)
浸透率	9~25mD(苫小牧CCS-1圧入テスト解析結果) 1~1,000mD(苫小牧CCS-2コア試験:封圧下、空気) 1~120mD(物理検層解析結果)
水圧入テスト (苫小牧CCS-1)	最大1,200kl/日(掘削深度1,077~1,217mのうち57.5m)

2.8.2 遮蔽層

萌別層泥岩層は、層厚約 200m のシルト岩～泥岩からなる。微化石分析による堆積環境解析により、水深数 10～数 100m の比較的浅い海底で安定的に堆積したと推定される。周辺坑井間で対比できることから、貯留対象領域を覆う領域で十分な厚さがあり(図 2.8-2)、コア試験結果からは水浸透率が $0.8 \times 10^{-3} \sim 1.7 \times 10^{-3} \text{mD}$ 、スレシヨルド圧力が 0.75MPa、

1. 65MPa、1. 67MPa の結果が得られている。

また、調査井における萌別層泥岩層下部でのリークオフテスト結果から、等価泥水比重で1.50の強度を確認している。

以上の調査、分析結果から、萌別層泥岩層は良好な遮蔽性能を有すると考えられる。実地調査から得られた遮蔽層性状の概要を表2.8-2にまとめる。

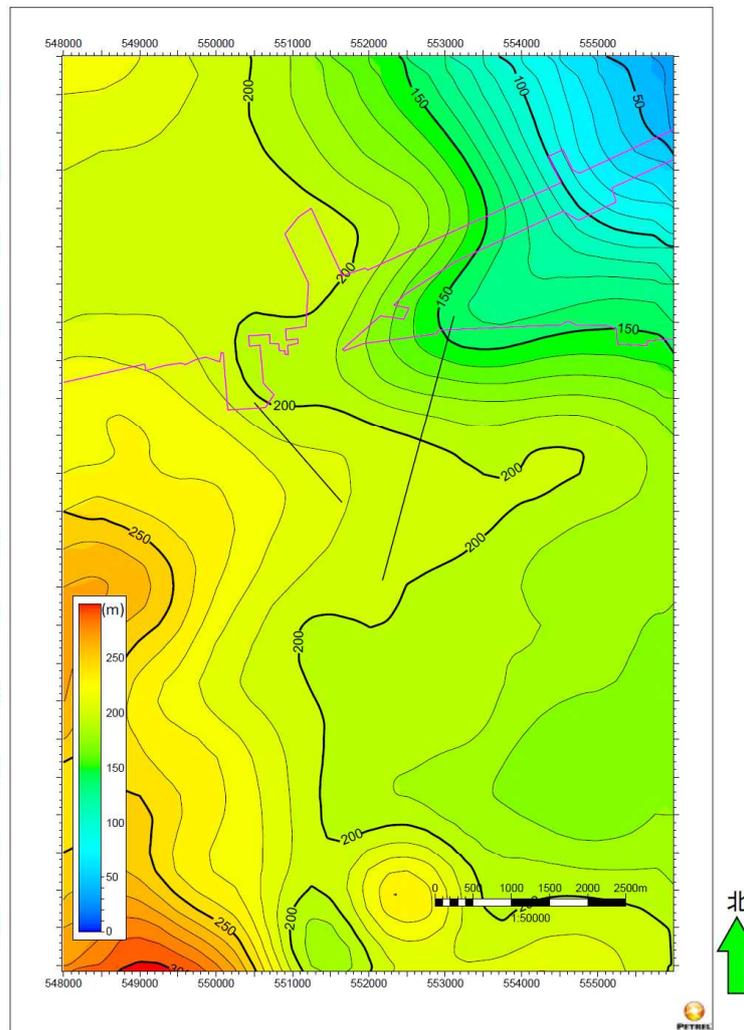


図 2.8-2 萌別層泥岩層の等層厚線図（等層厚線間隔：10m）

表 2.8-2 萌別層泥岩層 遮蔽性状一覧

項目	
層序	萌別層泥岩層(萌別層上部)
岩相	シルト岩～泥岩
層厚	約200m
孔隙率	32.4～37.2%(苫小牧CCS-2コア試験:封圧下)
浸透率	$0.80 \times 10^{-3} \sim 1.73 \times 10^{-3} \text{mD}$ (苫小牧CCS-2コア試験:水浸透率)
スレシヨルド圧力	0.75, 1.65, 1.67MPa(苫小牧CCS-2コア試験:CO ₂ -水系段階昇圧法)
リークオフ圧力 (苫小牧CCS-2 リークオフテスト)	14.6MPa(等価泥水比重:1.50) (萌別層泥岩層(苫小牧CCS-2)991mVD(垂直深度))

2.8.3 地質モデル構築

(1) 構造モデル構築

シミュレーションを実施する際に必要な地質モデルを構築するため、苫小牧3Dデータで解釈された各層準の時間構造を深度構造へ変換した。

構造モデル構築には、地質構造解釈で作成されたホライゾン(上位より、鷓川層上限、萌別層上限、萌別層海進期堆積体(TST)上限、萌別層高海水準期堆積体(HST)上限、萌別層HSTデルタ上部基底、萌別層HST基底、荷菜層上部基底)を用いた。深度変換された萌別層砂岩層上限(萌別層HST上限)のモデル断面位置図を図2.8-3、主要な層準の東西モデル断面を図2.8-4に各々示す。

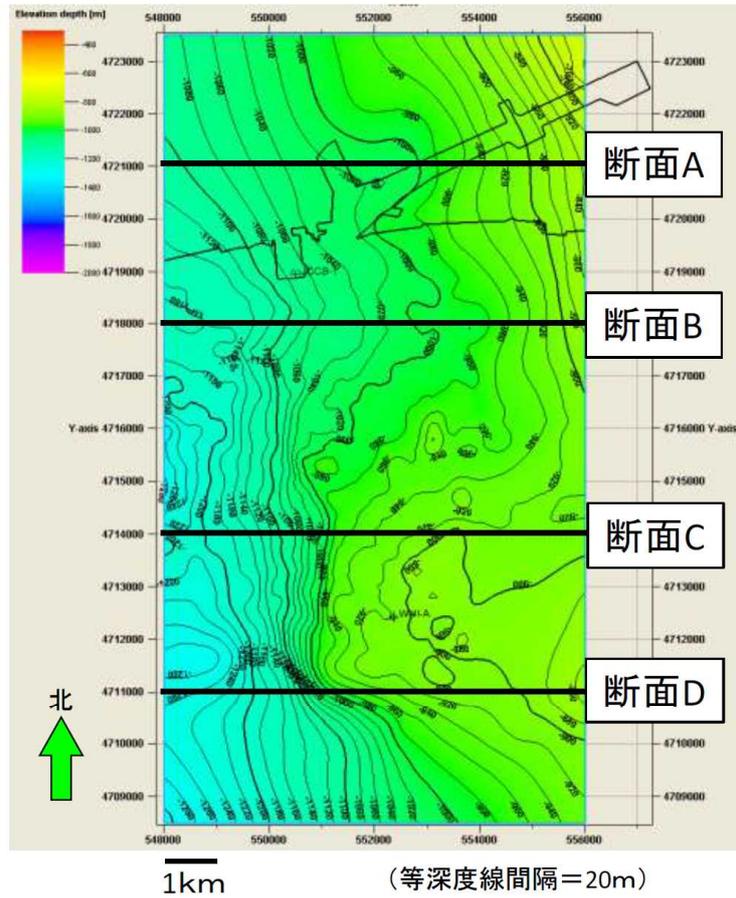


図 2.8-3 モデル断面位置図（構造図は萌別層砂岩相（H S T）上限）
 （図中の X 軸および Y 軸は世界測地系 WGS84 の UTM54 系の座標）

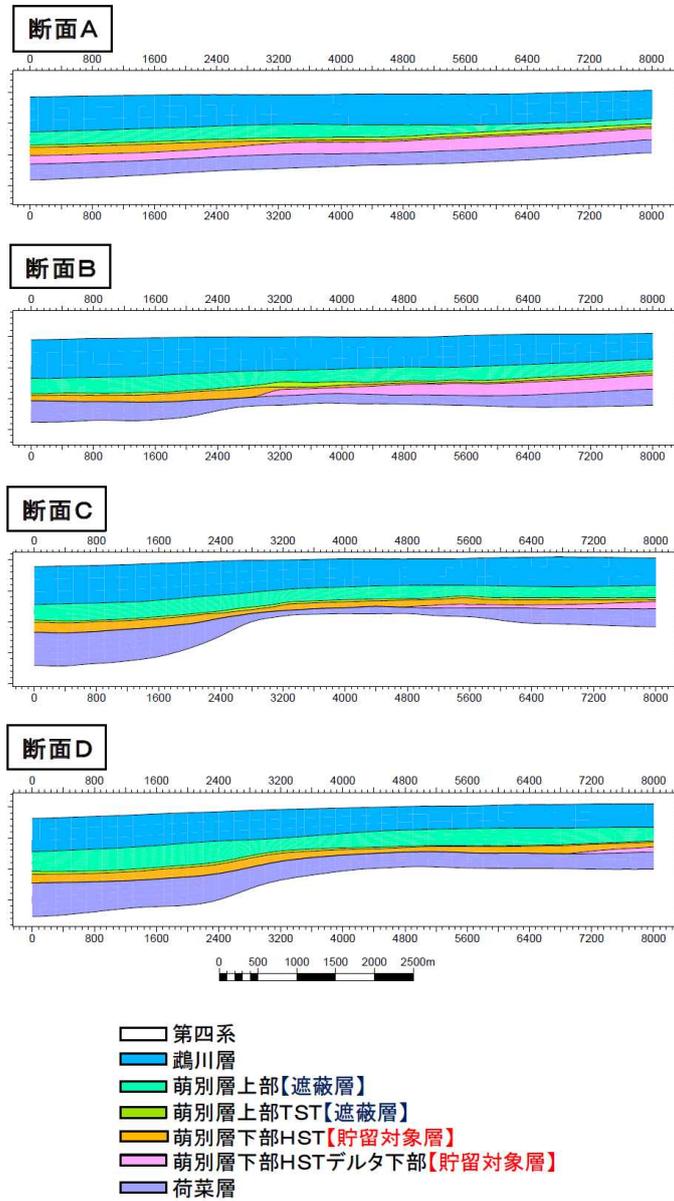


図 2.8-4 モデル断面図（上から順に断面 A~D、スケールは m）

CO₂挙動予測シミュレーションを行うため、各層準内に以下のようにグリッドセルを作成した。

・水平方向のグリッドセルサイズ

X方向 (i) およびY方向 (j) : 200m 8km×15km

(i 方向セル数 : 40 セル、j 方向セル数 : 75 セル)

・垂直 (k) 方向のグリッドセルサイズ

鵜川層 : 3 レイヤーに分割 (k 方向セル番号 : 1~3)

萌別層上部 : 10 レイヤーに分割 (k 方向セル番号 : 4~13)

萌別層TST : 2 レイヤーに分割 (k 方向セル番号 : 14~15)

萌別層HST上部 : 15m ごとに分割 (k 方向セル番号 : 16~25)

萌別層HST下部 : 15m ごとに分割 (k 方向セル番号 : 26~38)

荷菜層 : 5 レイヤーに分割 (k 方向セル番号 : 39~43)

主たる遮蔽層である萌別層上部は、CO₂貯留対象領域では十分な厚さがあり良好な遮蔽性能が期待できる。ただし、北東部の陸域では遮蔽層が徐々に薄化していく傾向が確認されていることから、北東部陸域においては薄い遮蔽層を設定した。

萌別層TSTについては便宜上遮蔽層と呼んでいるが、苫小牧CCS-1では上部に砂岩層、下部に泥岩層が認められたため、その両層を表現するためにレイヤー数を2とした。

萌別層HSTは、CO₂圧入対象層準の萌別層砂岩相でありシミュレーションを詳細に行うため、上下の地層よりも小さな垂直方向のセルサイズとなるようにした。なお堆積物の堆積方向を加味して、萌別層HST上部はFollow Baseと呼ばれる手法で、萌別層HST下部はFollow Topと呼ばれる手法でレイヤーを作成した(図2.8-5)。

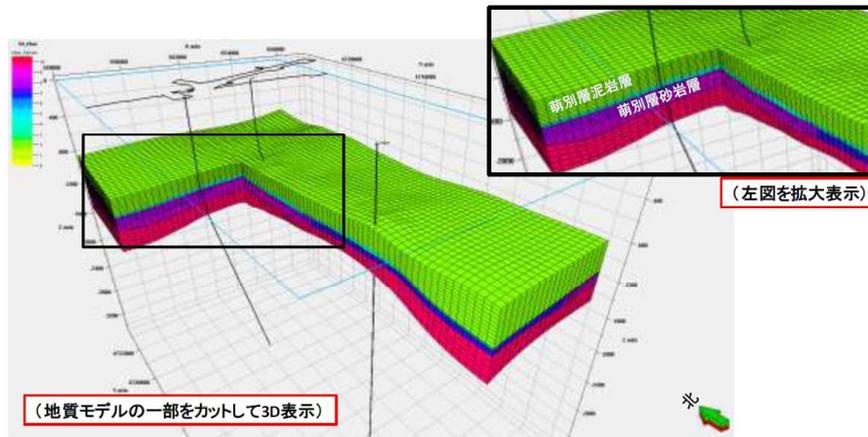


図 2.8-5 グリッドモデル概観

(2) 属性モデル構築

構築した構造モデルを基に、各セルに属性を与えた。属性は、堆積相解析で設定した堆積相区分として与えた。属性モデルに与えた堆積相区分概念を図 2.8-6 に示す。萌別層HSTは堆積環境により西よりスロープ (6)、陸棚 (7)、デルタ上部 (8)、デルタ下部 (9) の4つに区分される。

萌別層TSTは、沖側 (3：泥岩層)、陸側上部 (4：砂岩層) ならびに陸側下部 (5：泥岩層) に区分した。

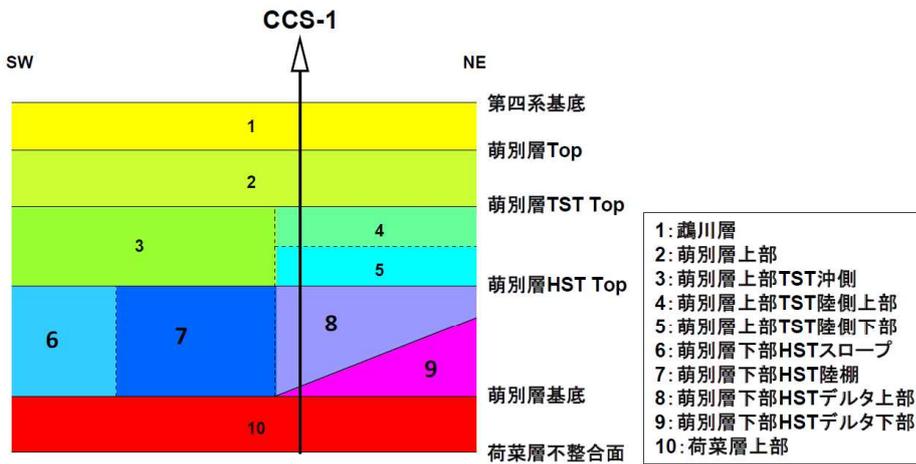


図 2.8-6 堆積相区分概念図

2.8.4 CO₂挙動予測シミュレーション

構築した貯留層モデルを用いて、CO₂挙動予測シミュレーションを行い、貯留層および遮蔽層の性能評価を実施した。シミュレーションでは、CO₂を25万トン/年×3年を目途に圧入し、圧入期間中およびその後の長期間にわたって貯留CO₂の挙動予測等を行っている。CO₂挙動予測シミュレーションの結果および評価については、第3章で示す。

2.8.5 弾性波探査シミュレーション

滝ノ上層T1部層と同様に、CO₂挙動予測シミュレーションで得られたCO₂の拡がりの予測結果から、弾性波探査によるCO₂賦存範囲の検出可能性等を検討することを目的として、弾性波探査シミュレーションを行った。

萌別層砂岩層ではCO₂累積圧入量12.5万トンの時点で、CO₂の拡がりには明確に検知できることがわかった(図2.8-7)。このため萌別層砂岩層においては、累積CO₂圧入量10万トン、12.5万トン、15万トンというCO₂圧入過程で弾性探査を繰り返し実施することにより、CO₂挙動(拡がっていく様子)が検知可能と判断した。CO₂累積圧入量25万トン時点の結果を図2.8-8に示す。

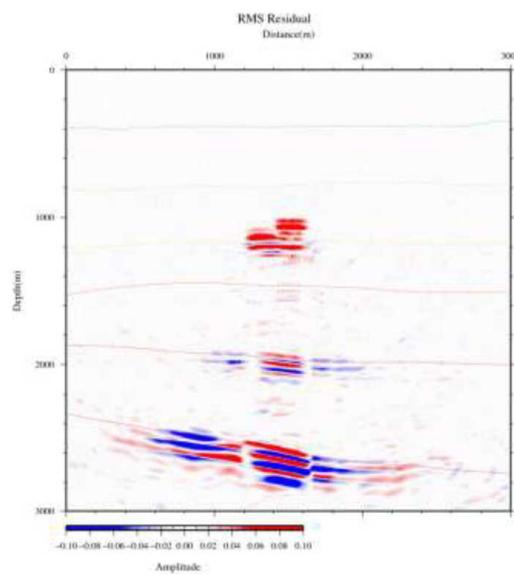


図 2.8-7 差分 (深度断面、萌別層砂岩層、CO₂圧入12.5万トン圧入後)

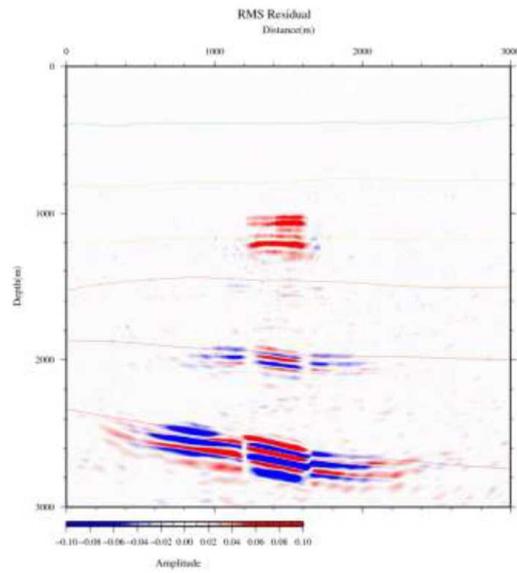


図 2. 8-8 差分（深度断面、萌別層砂岩層、CO₂圧入 25 万トン圧入後）